

なぜ女性は背の高い男性を好むのか？

大竹文雄

1. 三高

日本の女性が結婚相手の男性に求めるものとして「三高」（高学歴・高収入・高身長）という言葉がかつて流行した。例えば、平成 10 年版の『厚生白書』に、「1950 年代後半～1960 年代前半（昭和 30 年代）生まれの女性たちにとって、郊外専業主婦生活は、それだけでは「夢」ではあり得なくなかった。高学歴で就業経験もあり、同級生や同僚として対等に男性と付き合い、1980 年代の華やかな消費文化も経験してきたこの世代の女性は、「単なる主婦」になるだけの結婚生活には、飽き足らなくなっていた。このような女性の変化をとらえて「キャリアウーマン」「三高志向」など様々な呼び方がなされた。」という指摘がある。この年の厚生白書は、このような女性の三高志向が晩婚化を招いた原因の一つで、それが少子化にもつながったと述べている。

もっとも、雑誌「CanCam」によれば、最近では「三高」から「三低」に変わってきたという。ただし、女性の好みは、低学歴・低収入・低身長に変わったのではない。三低とは、「低姿勢」「低リスク」「低依存」男のことを言うらしい。具体的には、「低姿勢」はレディーファースト、「低リスク」は公務員や有資格者などの安定した職業、「低依存」は相手を束縛せず、互いの生活を尊重する男性のことを指している。なかでも、最重要視されているのが「低姿勢」だという。

どちらにしても、女性が結婚相手に望むものの中で、経済的要因は大きい。80 年代後半というバブル時代には、「高収入」がキーワードであったものが、雇用不安の時代には「低リスク」がキーワードになったのに過ぎない。

2. 身長プレミアム

三高のうち、高学歴は高所得と密接な関係をもっている。平均的には、学歴が高いほど高収入である。女性は単に学歴が高いことそのものを高く評価しているのではなく、学歴が高いことが所得が高いことと高い相関をもつことをよく知っているのである。もちろん、学歴が同じであるほうが、話題が合う可能性が高いというのもあるだろう。それでは、「高身長」というのは、単に「格好いい」という見かけだけを結婚相手に求めているということだろうか。体格のいい男性を好むというのは、生物としての本能的な好みなのかもしれない。ひょっとすると、身長の高さというのも、高収入という経済的な属性と関連があるのではないだろうか。それを、女性は経験的に知っているために、「三高」の男性を求めているのではないだろうか。

最近の報道によれば、中国では、労働市場や結婚市場で背が高いことが有利であること

を背景に、身長を伸ばすためのストレッチ器具の CM がテレビで頻繁に流れ、足の骨を折って骨を伸ばすというイリザロフ法と呼ばれる手術を行うことで有名な病院もあるという (<http://www.local6.com/news/4574140/detail.html>)。

アメリカでは、身長の高さは職業的な生活においても個人的な生活においても、成功のための重要な要素だと言われてきた。Persico, Postlewaite and Silverman(2004)は、過去 13 回のアメリカ大統領選挙のうち、10 回は背が高い候補が選挙に勝っている（最近の例外がジョージ・ブッシュ大統領である）こと、歴代アメリカ大統領の身長は、その当時のアメリカ人の平均身長よりも高かったことを示している。

Persico らは、身長が 1 インチ伸びると賃金が何パーセント高くなるかを明らかにするために計量経済学的な分析を行っている。その結果、1 インチ身長が高いと、イギリス人男性では時間当たり賃金が 2.2%高くなり、アメリカ人の白人男性では 1.8%高くなることを示している。アメリカやイギリスの成人男性で身長が低い方から 25%のグループと高い方から 25%のグループで賃金を比較すれば、その差は 13%以上にもなるという。彼らによれば、アメリカ男性における黒人と白人の賃金格差は約 15%であり、男女間賃金格差は約 20%であるという。つまり、身長による賃金格差は、人種間賃金格差や男女間賃金格差に匹敵するのである。

では、日本でも身長プレミアムは観察されるのだろうか。筆者らが行っている大阪大学 21 世紀 COE アンケートでは、賃金に加えて身長や体重も調査している。このデータを用いて日本の男性に身長プレミアムが存在するかどうかを大阪大学大学院の福澤洋樹が検証している。彼の暫定的な研究成果によれば、学歴、勤続年数、企業規模、親の学歴、育った家庭の生活水準などをコントロールしたとしても、1 センチ身長が高くなると時間当たり賃金は約 1.5%高くなるという身長プレミアムが観測された。アメリカやイギリスでは、1 インチあたり 2%程度の身長プレミアムであるから、日本身長プレミアムはアメリカやイギリスよりも遙かに大きい。1 センチで 1.5%であるから、10 センチでの身長差は 15%の賃金格差を、20 センチの身長差は 30%もの賃金格差を生むことになる。にわかには信じられないくらいの高身長プレミアムの大きさである。

3. なぜ身長プレミアムが存在するのだろうか

農業や狩猟のように肉体的な能力が経済力の重要な決定要因だったと考えられる時代であれば、身長プレミアムが存在しても不思議ではない。しかし、オフィスでの仕事が多くなった現在で、しかも高所得の仕事の多くがホワイトカラーである状況で、身長が高いことがどうして、経済的な成功をもたらすことになるのだろうか。

第一に考えられるのは、身長は経済学者に観察できないような所得稼得能力を代理しているのに過ぎないという考え方である。身長が高いということは、育った家庭環境が裕福であったことを示している可能性がある。そうであれば、教育水準も高くなるであろうし、親のネットワークを通じて高い所得を実現できるかもしれない。Persico 他(2004)の研究も福澤の研究も、これらの要因をコントロールしても依然として身長プレミアムが計測され

ることを示しているのである。特に、Persico 他(2004)では、学力テストの結果までコントロールしている。

それでは、何が原因なのだろう。やはり、ホワイトカラーの時代においても、身長に代表される体力は、所得を決定する重要な要因なのだろうか。

Persico 他(2005)は、この点を明らかにするために、何歳の時点での身長が現在の所得に影響を与えているかを分析している。もし、現在の体力を身長が代理するだけであれば、大人になってからの身長が重要であって、小学生や中学生の時に身長が高かったかどうかということは関係ないはずである。彼らが明らかにしたのは、現在の賃金を決める上で最も重要なのは、現在の身長ではなく、16歳の時点での身長の高さだということである。

では、なぜ16歳時点で身長が高かったことが現在の賃金に影響するのだろうか。彼らは、高校においてスポーツやクラブに参加していたか否かを説明変数に加えると身長プレミアムが小さくなることを発見している。つまり、16歳時点で身長が高いと、体育会系のクラブに参加する可能性が高くなり、そうした社会活動によって、リーダーシップや組織を運営していくノウハウを学ぶ機会が高まるのではないだろうか。そのような能力を獲得することが、社会で成功する上で重要なものかもしれない。

4. 運動部と労働市場

松繁(2005)は、日本での体育会系運動部出身者が、労働市場で有利なのか否かを検証した研究を紹介しており、体育会系が労働市場で評価される理由を議論している。例えば、梅崎(2004)は、スポーツ系サークルの出身者は、第一志望の企業に就職する確率が高いことを確認しており、しかも、それは単にOBのネットワークを直接利用することができたのが原因ではなく、クラブで獲得したリーダーシップなどの能力が評価されるためであるという。松繁(2005)は、企業が若手社員に求める能力で重要なものとそれを身につけた時期について調査した大阪商工会議所の調査を紹介している。身につけておいてよかった能力として「困難にめげず、最後までやり抜く」、「状況変化にフレキシブルに対応する」、「自分の思いを伝えて相手を動かす」、「チームに貢献し、役割を果たす」という能力が挙げられている。そして、これらの能力を身につけた時期として、小学校ではスポーツ、中学校から大学までは、体育会系の部活が多かったというのである。松繁(2004)では、体育会系クラブ・サークル出身者で昇進可能性が高かったのは、マネージャー・主事・会計の役割をしているものであることを明らかにしている。松繁(2005)は、「企業で求められるのは組織を運営する能力」であり、「部活が能力や適性を磨く鍛錬の場としてある程度適して」といると指摘している。そうしてみれば、日本でも、青年期で身長が高いことが同級生の間でのスポーツにおける相対的な有利性を高め、運動部への加入率を高め、それが労働市場で成功するための訓練につながっているという経路が成り立っているようである。

5. 女性の本能

身長プレミアムの源泉は青年期における運動部への加入率を高め、それが組織を運営す

る能力の形成に役立つという点にあった。女性が、高身長を好むのは、そうした背景を簡単に代表する誰にでも分かる指標であるからだろう。女性の直感力は実はそれに止まらない。Persico 他(2004)の分析は、親が子供の所得に与える影響の中で、重要なものは父親の身長であり、父親の身長が高いことが16歳時点の身長が高いことを予測するという事を明らかにしている。つまり、自分の子供に残せるもので最も重要なのは、身長であり、青年期に背が高い子供をもつためには、背が高い男性と結婚することが必要なのである。女性はこういうことまで本能的に分かった上で、三高男性を選んでいたのである。

6. あきらめるのはまだ早い

背が高いことは平均的には賃金にプラスの影響を与えるが、賃金の個人差は大きい。身長プレミアムは全ての人に共通に現れるのではない。身長プレミアムが観察された本当の理由は、身長が低いグループでは、身長が高いグループに比べて身長グループ内での賃金格差が大きいことにある。身長が低いグループの中での低賃金層は、身長が高いグループの中での低賃金層に比べて2%から6%程度賃金が高いが、それ以外の賃金階層では身長の影響は見られないか、かなり小さくなる。¹おそらく、身長が低いグループの中には、身長が低いという不利な状況に直面して、あきらめてしまうものがある一方で、その不利な条件を克服する人が大多数だということだろう。女性からみれば、その意味で「高身長」男性は「低リスク」なのかもしれない。

学生時代のように将来の所得が不確実な段階では背の高い男性がもてるのは自然だ。同じ理由で、結婚年齢が若かった頃は身長が将来所得の重要な指標であった。しかし、晩婚化が進んだ現在、女性が結婚する時点では、男性の身長以外の所得に関する情報が豊かになっている。

女性の結婚相手に求める条件が「三高」から「三低」に変わってきたのも、そのあたりに理由があるかもしれない。背が低い男性にもまだまだチャンスがある。

参考文献

- Persico, Nicola., Andrew Postlewaite, and Dan Silverman(2004) “The Effect of Adolescent Experience on Labor Market Outcomes: The Case of Height”, *Journal of Political Economy*, vol.112, no.5, 1019-1053
- 梅崎修(2004)「成績・クラブ活動と就職－新規大卒市場におけるOBネットワークの利用」
松繁寿和編『大学教育効果の実証分析』第2章、29-48、日本評論社。
- 松繁寿和(2004)「英語力と昇進・所得－イングリッシュ・ディバイドは生じているか」
松繁寿和編『大学教育効果の実証分析』第2章、29-48、日本評論社。
- 松繁寿和(2005)「体育会系の能力」『日本労働研究雑誌』No.537,49-51

¹ 分位回帰分析という手法を用いた福澤の研究による。